



郷土史

ていね

第73号

平成26年1月8日

手稲郷土史研究会会報

第92回(平成25年12月11日)定例会の研究発表要旨

オホーツクの海にソ連にしん輸入船団を率いて

前田 國井 和夫 氏

「ソ連にしん」の輸入事業は、1960年(S35)に始まり、1970年(S45)まで、11次に及びましたが、私は最後の2年、第10次と第11次に船団長として、輸入船団を率いる貴重な体験をしました。

そもそも、我が国は、世界有数の漁獲国で、鮮魚は輸入禁止品目でした。それが、試験輸入の形で許可された決め手は、当時のにしん漁が極端に不振であったことです。

明治30年に100万t近くもとれた、いわゆる「石狩湾—サハリン系群」のにしんが、昭和27年を期に、バツリ獲れなくなり、原因として、潮の流れの変化説が取沙汰されました。つまり、漁業者も加工業者も、そして、消費者も、にしんの回遊を渴望していた状況に理解が深まり、ネガティブ物資であったにしんの輸入を、国が許可したのです。

何の物資でも、輸入といえば、相手側が荷造りしたものを積取りに行く、というパターンを思い浮かべますが、この「ソ連にしん」の輸入は、洋上積取り、といういっふう変わった取引でした。

日本側船団が、遠くオホーツクの海を突き切って、シベリア沿岸の指定された漁場に向くと、ソ連側は、予め付近一帯に定置網を入れて「群来」を待ち、獲れ次第我が船団に積み込む、という要領です。

私が船団を率いた1969年(S44)は、丁度、輸入事業10年の節目に当たりましたが、この年は、ソ連側の観測による「群来早し」の情報で、ソ連にしんの輸入事業団を形成している商社が船団編成を急ぎ、例年より1週間程度早い出港となったのです。

私の率いる船団は、5月7日に出航、12日かかって漁場に到着しましたが、その間、事業始まって以来という大時化に悩まされ、又、予想外の流水群に阻まれて身動きが取れず、急遽、ウラジオストックに砕氷船での誘導を打電、危うく難を逃れる一幕もありました。

オホーツク海の時化の有様は、船がピッチング、ローリングの限りをつくす恐ろしさですが、後日、小林多喜二の「蟹工船」を読むと、この時化の描写が見事で、思わず相づちを打ったものでした。

こうした難行苦行の末、たどり着いた漁場での現物検査は、嬉しいことに魚体は5~6年もの、数の子の歩留まりも8%と好調、船団は、アヤンとフヨードタの2漁場に分かれて積取りを開始、アヤンに5日間停泊して積取りを行いました。

次回予定

次回(2月12日)は、木村博氏の「45周年楽しく歩いて健康づくり」と菊池慶一氏の「流氷の世界~映像から見た自然の魅力と変化~」の研究発表を予定しております。

会場は、視聴覚室です。

1船平均240tの積取りを終った船は、順次稚内の帰港地に帰る手筈でしたが、私の船は最後まで残り、稚内に帰港したのは出港してから27日目の6月2日でした。

輸出先はセントロソユーズ(全ソ連消費組合中央会)で、輸入商社は、日本協同組合貿易(株)以下11社、この年の生鮮輸入にしんは約4,000t、魚体も数の子の歩留まりも良く、関係者の総てに歓迎され、この年も大成功に終わったにしん輸入事業でした。



北国の泰斗～富良野人の聡さん

稲穂 高木 秀子 氏



1977年(42歳)より厳寒の地、富良野に移住。すっかり富良野人化した倉本聡氏を尊敬の念を込め、北国の泰斗と呼ばせていただく。そして多くの著書、ドラマに触れていくうち、より身近に感じるようになり、このタイトルになった。

○ 北海道で土地探し

候補地に美国、忍路などが挙がったが、水が出ないなどあって、飲み屋で知り合った人の紹介で富良野へ。そこはどろ亀先生(高橋延清・元東大北海道演習林長)が設計した文化村(森と人間の共存

する土地)、その樹齢約80年のシラカバの太さにシビれた聡さん、わずか数時間でその土地の購入を決める。翌年、雪解けを待って家を建てるも、その冬は寒さで苦勞する。東京の高名な建築家の設計であったが断熱材の入っていない壁の中に水道管を這わせたため毎晩破裂した。またぼットン式トイレはマッターホルンのごとく何が何して何が傷ついて大変だったとこの頃はまだ「北国のシロウト」だった聡さん。

土地は当初1400坪だったが、推理作家の佐野洋氏の土地などを買い足し3000坪になった。この頃、富良野で多くの知己を得、「北の国から」のモデルとなった個性豊かな富良野人の面々と出会う。1981年～2002年 フジテレビ系列で「北の国から」放映。

○ 富良野塾(1983～)、富良野自然塾(2006～)

富良野塾では広さ4haを年7万円で借り、廃屋を改修したり、丸太小屋を専門の大工の手を借りることなく塾生達が作った。作業の後で授業をやったが時には午前1時を過ぎることもあった。ここで「谷は眠っていた」など数々の演劇が生まれる。

彼ら塾生に生活の必需品を聞くと「水、火、ナイフ、食べ物など」同じ質問が渋谷の若者では「ケータイ、車、テレビなど」

○ 豊かさと便利

テレビが家庭に1台だった時代は家族で感動を分け合った。

今、わずか数メートル先のテレビにリモコンを使う。結果、筋力が衰え、金を払ってジムに行き、何の生産性もない重いものを持ち上げたり、下ろしたり。また目的地に着くことのない自転車を漕いでいる。便利さと引き換えに失ったものの多さに気づくのだが、かくいう自分もリモコンの見つからない時は相当苛立っている。

現在、聡さんはじめ自然塾生の方々は閉鎖になったゴルフ場に植林をして森に返す活動をしている。萱野茂先生の言「自然は天からの借り物である。昔からアイヌはその利子だけで食べることをやってきた。今の日本は元金にまで手をつけている」・・・今、自分に来ることは何だろう? 雑草をとらないこともCO2の削減になるのだろうか?

☆ 催し物案内 ☆

= 講演会とお宝見学 =

・講演会(10:00～11:30)

東洋一の選鉱場を誇った手稲鉱山(茂内義男氏)

西小一期生の絵画64年ぶりに里帰り(一ノ宮博昭氏)

・見学会〔郷土資料室展示物見学〕(11:30～12:00)

📌 日時:平成26年1月29日(水) 10時～12時

📌 会場:手稲西小学校(金山3条2丁目 TEL 681-2853)

📌 入場料:無料

📌 申し込み:星置まちづくりセンター(Tel 695-3222)

1月22日(水)まで受付

📌 主催:夢のまちづくり星置・山口の会

* 駐車場は収容台数に限りがありますので、

自家用車はご遠慮下さい。